如水公二百五十回遠忌と太宰府天満宮

豊臣秀吉の参謀として数多くの軍功をあげた黒田孝高は、息子長政に家督を譲ったのち如水と号し、太宰府天満宮の傍らに隠宅を造らせ隠棲生活を送りました。連歌に熱心であった如水は、天満宮の大鳥居信岩と連歌を通じて雅交を重ね、連歌師の木山紹印を屋主として連歌屋を再興しました。

さて、黒田如水は慶長9（1604）年3月20日に59歳で世を去ります。法号は龍光院殿如水円清大居士といい、福岡城本丸内にある水鏡宮に祭られました。如水の遠忌（50回以降の回忌法要）は江戸時代の間に4回行われ、元禄16（1703）年に百回遠忌、宝暦3（1753）年に百五十回遠忌、享和3（1803）年に二百回遠忌、嘉永6（1853）年に二百五十回遠忌がそれぞれ当時の福岡藩主によって執り行われました。

二百五十回遠忌については、「龍光院様御遠忌覚書」（吉田家文書）にくわしく記されており、嘉永6年3月18日から3日間、黒田家の菩提寺である博多の崇福寺にて「二夜三日」の御法事が執り行われています。この法要にさいして、連歌屋は如水公御追善のための連歌百韻を奉納しました。これは、「連歌屋は如水公の格別の尊慮により建立され存続してきたので、御霊前に寸志をお供えしたい」という連歌屋からの願い出によるものでした。この願い出に対し福岡藩の家老は、「連歌屋の考えは誠に殊勝であり、特別の配慮をもって願いの通り連歌の奉納を許可する」と返答しています。さらに、嘉永6年11月15日に福岡城本丸において太宰府天満宮の連歌興行が行われることとなり、延寿王院と連衆中（連歌会席に一座する作者達）が水鏡宮へ拝礼することが許されました。天満宮一行は、水鏡宮に連歌懐紙、鈴瓶子、鏡餅を奉納し、本丸御殿内にある釈迦の間にて連歌興行を行いました。床の間には如水公の御影が掛けられ、少将様（第11代藩主黒田長溥）、侍従様（第12代藩主黒田長知）、家老衆、御納戸頭衆が列席し、その後、延寿王院らは御居間において御両殿様（長溥、長知）への拝謁も許されたということです。

如水の手厚い保護を受けた太宰府天満宮は、連歌によって黒田家との関わりを持ち続けたのでした。

公文書館　太田黒　真美